The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ゲーム読み物

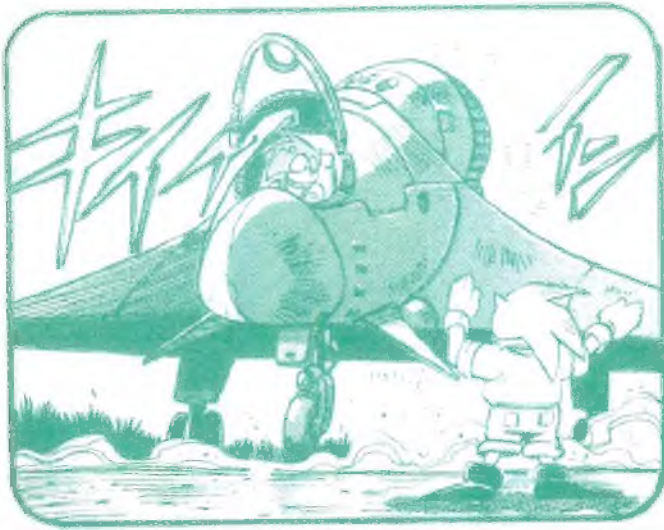
ソニックの大冒険

作／寺田憲史　絵／おちよしひこ　©1991 SEGA

ソニックたん生の秘話・前編

「よし、着いたぞ。アレだ。」
ポーリーは、そう言って、ゆっくりとそうじゅうかんをたおしていきました。
ポーリー、そしてニッキ、タニア、エミーの乗った水上飛行機が、ぐんぐん湖に向かって降りていきます。
「パパア、アレだぞって言うけど。なぁ～んにもない原っぱしか見えないじゃない？」
タニアが言いました。
たしかに、ヘッジホッグ湖の美しさにくらべれば、ぐ～んと落ちる小さな湖。その岸に、ちょっとこわれた感じのデッキがせり出ているだけで、あとは赤茶色の土が目立つ草っぱらが広がっているだけです。
ニッキとエミーも、思わず顔を見合わせてしまいました。
「ちょっとみんな、飛行機で散歩に出ないか？」

つい一時間前。家で遊んでいたニッキたちは、ポーリーにこうさそわれて飛行機に乗りこんでいました。
ニッキは、お父さんのそうじゅうする飛行機に乗るのが大好きです。それは、いつだって、とってもステキなところにつれて行ってくれるからで、しかも、目的地に着くまで、お父さんがいろいろな国で見てきたことを、たくさん話して聞かせてくれたからでした。
でも、今日はちょっと様子がちがいます。そうじゅうしている間も、なにか考えこんでいるようで、いつものお父さんとはちがうのです。
それに、つれて来られたのが、ただの原っぱっていうのは、どう考えたってヘンです。
ザザア〜ッ！
水上飛行機は、ゆっくりと湖面に着水しました。
そして、ポーリーは、目の前に広がる荒れ果てた原っぱを見渡すと、ニッキたちにこう言いました。
「父さんはむかし、ここでジェット機のテスト・パイロットをやっていたんだ。」
「ええ？」
「そして、ここは、父さんの親友、ソニック・ジョーが死んだところでもあるんだよ。」
ニッキは、ノドの奥のほうでゴクンとツバを飲みこみました。
ソニック・ジョーだってぇ？
それって、もしかしたら。
あのソニックと関係あるんだろ〜か？
「見て、ニッキ――――。」
ポーリーが、なつかしそうに原っぱを見回しています。エミーは、それに気づくと、ニッキにささやくように言いました。
「ニッキのパパ、よっぽどそのソニック・ジョーっていうヒトが大切だったのね。」
「うん。ぼく、あんな父さん見たのはじめてだな。」
「うふっ、ニッキったら。」
「な、なんだい、エミー？」
「なんだか、パパを取られちゃった子みたい

ここは…、
ソニック・ジョーが死んだところでもあるんだよ。
ソニック・ジョー？

に、悲しそうな顔しちゃって。」

「そ、そんなこと……。」

ニッキは、そんなことないってばぁ、と言おうとして、ちょっと言葉をうやむやにしました。

たしかに、エミーが言うとおり、今日のお父さんは、ニッキにとうてい分からないことを考えているようで、それでちょっとさみしく思っていたのです。

実は、ポーリー、ここにわざわざニッキをつれてきたのにはワケがありました。

ヘッジホッグ・タウンでは、ここのところ、ときどき現れるソニック・ザ・ヘッジホッグのことで話が持ちきりです。しかも、そのパワーは、光速を超えたパワーだとか。

ポーリーは、そのことがちょっと気になっていたのです。

しかもしかも、たいていの場合、ソニックが現れた時、ポーリーのムスコのニッキは、一時行方不明になっています。

そこで、ポーリーはあることを思いたち、それをたしかめてみようと思ったのでした。

「父さんたちがここでテスト・パイロットをしていた時、みんな、光の速度を超えることに、それはそれは夢中だった……。」

ポーリーは、ニッキの肩を抱き寄せるようにして、静かにむかしのことを話しだしました。

「来る日も来る日も練習練習でね。だが、どうしても、光のカベは破ることができなかった。」

その時、タニアが口をはさみました。

「パパ、なんだってそんなに速く飛ぶことばっか考えてたの?」

「バッカだなぁタニア。ジェット機のテスト・パイロットだもん、あたり前じゃないか。」

「なによぉ、お兄ちゃん。自分だけ分かったふうに言ってさ!」

元気なタニアは、話になんかキョーミない!って感じにかけだしていってしまいました。

ポーリーは、それをニコリと見送って、また話を続けました。

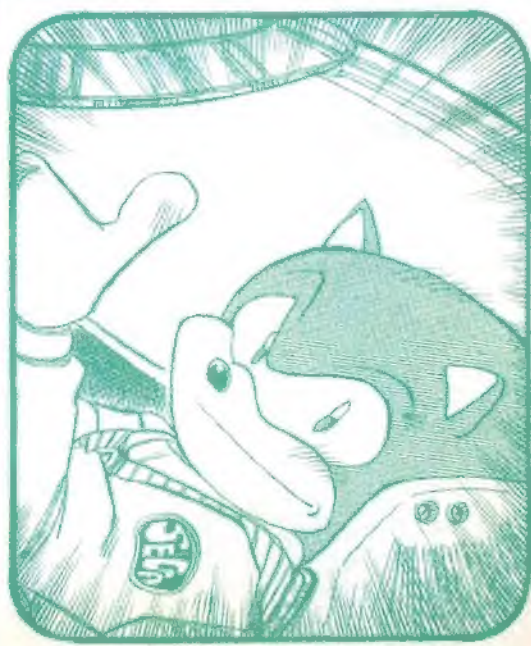
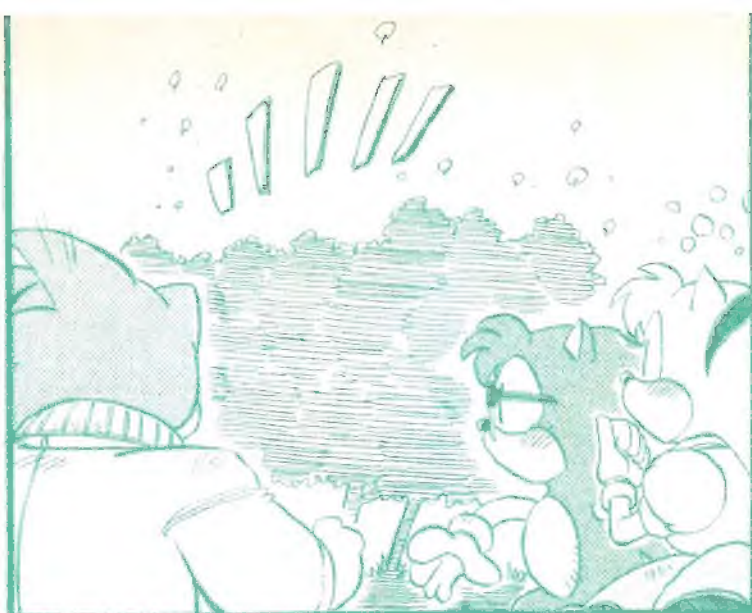
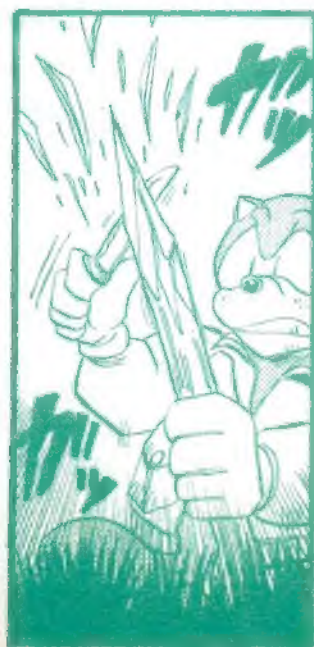
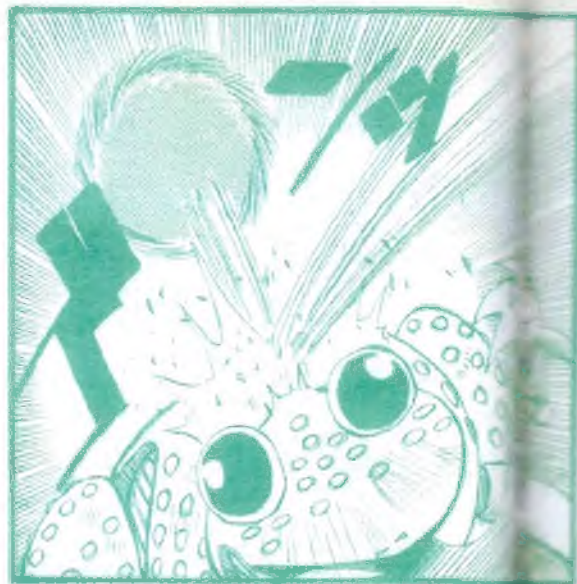
「だが、ある時、光速のカベを超えたヤツが現れた。」

「ええ?」
「おじさん、もしかして、そのヒトっていうのは……。」
ポーリーは、エミーにコックリとうなずきました。
「そう……。おじさんの親友で、ソニック・ジョーだ。そして、命の恩人である、ソニック・ジョーだ。」
「命の、……おんじん?」
「ああ、……そうだよニッキ。あの日、父さんは、今日こそ光速を超えてやるんだ!って、ちょっと気負っていた……。」
「きおう、って?」
ポーリーは、やさしく笑ってニッキの髪を軽くなでました。そして、
「つまり、やる気マンマンだったってわけさ。」
「う、うん……。」
「だが、気流がクルクルと変わる不安定な日だった。ジェット機が気流に飲まれたらおしまいだからね。ムリするべきじゃなかったんだよ。」
ポーリーは、そこでちょっとひといきつきました。そしてそれから、悲しいことをはき出すように、その日のことを一気に話しだしたのでした。

ソニック・ジョーの声が聞こえる!

あの日、ポーリーのジェット機は、気流の流れに強引にさからおうとしたため、はげしい乱気流に飲みこまれてしまいました。
ジェット機は、まるで竜巻きに飲みこまれたみたいに、クルクルと回転し、ポーリーはたちまちそうじゅうができなくなってしまったのです。
「くそぉ～!」
ひっしにそうじゅうかんをあやつろうとしても、ぜんぜん言うことを聞いてくれません。
ポーリーは、もうダメだと思いました。自分はこのまま死んでしまうのだな、とかくごしたのです。
でも、その時です。ポーリーは、気を失っていきながらも、かすかにこんな声を聞きとめていたのです。
「ヘッ。イナズマ・ポーリーって言われたお前が、しっかりしねぇ～か!」
な、なに?——だれだ?
次のしゅんかん、ポーリーのジェット機をクルクル回す乱気流が、なにかの強れつなパワーで、バサァ～!と切り裂かれました。そして、そのおかげで、ポーリーはその竜巻き

の中から脱出することができたのです。
「こ、これはいったい?」
ポーリーは、大空でジェット機をたて直すと、あたりをキョロキョロと見回しました。
すると、ポーリーのアタマのはるか上空に、グイ～ン!と上昇したばかりのジェット機が見えるではありませんか。
ジェット機のおなかには、カワイイ女の子がウインクしている絵が描かれています。ポーリーの親友がお気に入りの絵です。
「ソニック・ジョー! お前が助けてくれたのか!」
ソニック・ジョーがそうじゅう席から顔を出し、やったね!っという感じに親指を立ててみせます。そして、
「悪いな。どうやら、このオレが、先に光速のカベを破っちまったようだぜ!」
「なに?」
その時ポーリーは、なぜ自分が助かったのか、すぐに分かりました。
ソニック・ジョーが、乱気流に飲まれたポーリーを救うために、光の速度を超えるスピードで飛んで、ポーリーのジェット機を飲みこむ気流を突き破ってくれたのです。
「スッゴイやぁ!」
ニッキは思わず声を上げました。

でもその時、それまで一気に話してきたお父さんの顔が、ちょっとくもりました。
「だが、そのすぐ後に、……あの不幸が起きたんだ。」
「え?」
「ソニック・ジョーのヤツ、光速のカベを破る技が分かったぞ、って。大きく宙返りしたしゅんかん、……ヤツも、とても強力な乱気流にやられて。」
「まぁ……!」
エミーは、思わず体をふるわせました。

そのため、ポーリーは、すぐに笑顔を作って言いました。
「でもね。アイツは生きてるはずさ。」
「ええ?」
「たしかに、アイツは乱気流に飲まれて消えちゃったけど。でもね。それからよく、パイロットたちの間で不思議なことが起こるようになったんだよ。」
「不思議なこと、って?」
「パイロットたちが、そうじゅうしながら無茶をしたり、気流の流れをまちがったりすると、かならずどこからかこんな声がするようになったんだ。オイ、てめえ、しっかりしねぇ〜か! こんなスピードに、負けるんじゃねぇ!ってね。」
　ニッキとエミー、それにポーリーは、顔を見合わせてニッコリとしました。
　ニッキとエミーにしても、ポーリーが信じるように、ソニック・ジョーがどこかで生きているように思えたのです。

　ところがその時、
「キャァァァ〜〜〜〜! 助けて〜!」
林のほうでタニアの悲鳴が上がりました。
「タ、タニア!」
ポーリーたちは、ビックリしてその声のするほうに走っていきました。
　するとどうでしょう! タニアは、なんと巨大なイボガエルにつかまっていたのです。
「あ〜ん、パパァ〜、助けて〜!」
ポーリーは、すぐに落ちていた長い棒を拾い上げると、ナイフでその先をけずりだしました。ヤリにするつもりなのです。
「待ってろ、タニア!」
「あわわ……、と、父さん!」
「ニッキ! 何をしてる、無線だ。飛行機の無線の使いかたを教えただろう?」
「う、うん。」
「あれで、警察に連絡を取るんだ。早く!」
「は、……はい!」

ニッキは、湖のほとりにとめてある飛行機のほうにかけだしていきました。

でも！　その時、またまたというか。

「うわぁ〜〜〜！」

あわてたニッキは、湖の中にドッポーン！とおっこちてしまったのでした。

†

さて、そんなことを知らないポーリーは、巨大なカエルと大格闘です。

でも実は、そのイボガエル、例のあのエッグマンとオムレッツがそうじゅうする、メカ・ガエルだったのです。

「だはなや、ドクター。あのニッキの父さん、なかなかてごわいだなや。」

「ええい、今にあのソニック・ザ・ヘッジホッグが現れるわい。あんなのほうっとけ！」

そうですそうです、この二人。例の、あの〈エネルギー見っけたメカ〉をたよりに、ニッキを追ってきていたのでした。

そして、二人のねらいどおり、

「そ〜りゃあ〜、ロ〜リング・アタァ〜ック〜！」

青くかがやくスーパースター、ソニック・ザ・ヘッジホッグが現れて、いきなり巨大メカ・ガエルに必殺技をさくれつさせたのでした。

「おお！　こ、これが、ソニック・ザ・ヘッジホッグか！」

ソニックを初めて見たポーリーは、そのすさまじいパワーにひとみをかがやかせました。

でもそれと同時に、彼はなつかしい男の声を聞きとめたのでした。

「イナズマ・ポーリー……イナズマ・ポーリー……！」

「そ、その声は？」

「オレだ。……ソニック・ジョー。」

「ソ、ソニック・ジョー！」

ポーリーの背に、いつの間にか、大きく青くかがやく光の玉がういて見えていました。

そして、その声は、その光の玉から聞こえてきていたのです。

声は、さらにこう言ってきました。

「ポーリー。……そろそろ、お前さんだけには話しておかなくちゃならない時がきたようだ。ソニック・ザ・ヘッジホッグ。……お前のムスコの秘密をな。」

「な、なんだって？」

8月号につづく

▼ソニックのひみつとは何か？　次回、いよいよその真相が明かされる！